

Beretta 92X

Performance



Cover Illustration
U.S. ARMY
© WORLD PHOTO PRESS 2022
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

004 Combat Art: Impressions

004 第46回 **サイゴン物語** Saigon Memories
記者たちのベトナム戦争 [23]

ベトナム戦争 PACV Part 3

014 **ACVの未来を決める勤務評定下る!**
「巨大、速い、うるさい!」

022 **ベトナムを遠く離れて——。**

私的ベトナム戦争映画 / TVムービー Part 10 文/小倉 徹

まだ語られていない

024 **LST船員の記録** 第8回
UNTOLD SEAMAN BLUES

036 **北ベトナム軍と解放戦線の歩兵戦術** Part 2 —鉄をも溶かす赤い闘志 待ち伏せ—

044 **THE ENEMY** (the Viet Cong)

054 **Militaria Roundup!**
CWU-45/P & CWU-36/P フライヤーズ・ジャケット

068 **ウエスタンアームズ新製品リポート**

by SHOTGUN MARCY

●SVインフィニティ スピードコンプIV
●コルトM1911 ブラックアーミー

新企画! DJちゅうの

077 **GEARHEADS JUNCTION**

084 **東京マルイ 新製品リポート** by Takeo Ishii
コンパクトキャリヤガスガン4機種リポート
&発売直前! SAIGA-12K

092 **トイガンニュース**

●TANAKA WORKS
トカレフTT-33 HW

●.357マグナムWキャップ・
カートリッジ/6発セット

ニッポンのちからこぶ ●写真と文/菊池雅之

094 **令和4年度
富士総合火力演習**

098 **新製品情報 COMBAT mono**

ボスゲリラ不屈のトイガン魂!

100 **サバゲ・マスカラ・コントラ・マスカラ!**

102 **サバゲ三等兵APS部**

他力本願所願成就!
APSカップ最高峰を目指して!

COMBAT FRONT LINE

107 今月中田焦点!

108 新作映画情報『炎のデス・ボリス』
『哭悲 / THE SADNESS』『X』

104 第22回 Stringer Blues 写真・文/横田 徹

106 レアミリタリーテクノロジー

109 読者PRESENT & CIC

111 奥付&次号予告

ミリタリースポッター

A Seabee from Naval Mobile Construction Battalion 5 (NMCB-5) took up position during camp defense drill. NMCB-5 was in northern Saudi Arabia to provide engineering support for coalition forces during Operation Desert Storm.

The graffiti of his helmet cover depicts a “skull and crossbones.” The design originated in the way back in the Late Middle Ages as a symbol of death. In military contexts, it has been much favored as a helmet cover graffiti since Vietnam War. Without any war-hero bravadoes it is used as a hazard symbol in regard to poisonous substances.

Photo/US National Archives

米海軍建設工兵隊第5大隊(NMCB-5)の兵士が、訓練中に撮影に応じてポジションを取っている。兵士は「砂漠の嵐作戦」で、サウジアラビアの北に派遣中であつた。ヘルメットカバーには、中世に起源を持つ死を意味する「ドクロと骨」のグラフィティが描かれている。ベトナム戦争時代に、兵士たちが好んで描いた図像でもある。そんな戦争ヒーローのプラバードとは関係なく、危険物を示すシンボルとしても使われている。

US NAVY PATROL AIR CUSHION VEHICLE

ベトナム戦争 PACV Part 3 ACVの未来を決める 勤務評定下る! 「巨大、速い、うるさい!」



米海軍はベトナム戦争当時、陸軍より一足早くベルエアロシステム社が設計したSK-5のエアクッション艇をベトコンのゲリラ活動が強く疑われていたデルタでのパトロール用に運用した。水上、沼沢地、葦の原だろりと地形を選ばずに行動できるエアクッション艇、ACVの操船能力に注目したからにはほかならない。米陸軍でも第9歩兵師団第39騎兵部隊がACVを運用した。一時は部隊の増強が検討されたものの最終的にはわずか3艇のみの活動で終了した。残存する1艇は米本土の「陸軍運輸博物館」に収蔵されている。

構成／コンバットマガジン編集部
訳／河村喜代子
写真／米陸軍 Photos/US Army 米海軍 Photos/US Navy

ACVの実戦評価

第39騎兵部隊が、ベトナム入りして、およそ2年あまりも過ぎていた。今後のエアクッション艇、ACV (Air Cushion Vehicle) の実戦運用を見据えての判断は、最初の12か月でほぼ固まっていたといえる。正式なACVの評価テストが、1968年の6月から12月にかけて行なわれていたからだ。ムーア少佐がまとめた評価書には、第39騎兵部隊が実戦に入るよりも前に、すでにACVが使われていたことを踏まえて、ACVに対して出されていた賛成意見と、反対意見の両方が、明らかに記された内容になっていた。とくに注目すべき点は、武装に関する問題だった。また、艇のシステム面で、明らかに不足していると判断される部分があることも指摘されていた。そこについては、実戦配備されるなかで改善がはかられることになった。

ACVの作戦実行能力と補修維持管理性能

この点については、適性ありと判断が下された。補修して、使い続けるメンテナビリティもありと、判断された。ACVは、サイゴンの西に広がる葦の原のような環境下で、もっともよく性能を発揮できる。作戦が沼沢地、水路沿岸、もしくは内陸部の水路で展開されている場合に限るとの限定付きではあるが、ACVは、ほかのいかなる船も真似ができないユニークな性能を発揮した。なかでもデルタ地帯を横断していく性能は、満足できる結果を残していた。ACVを維持していく上で、修理の難易度、つまりメンテナビリティは、見逃すことができない重要な事項となる。それは艇を管理していく上で大きな要素を占めるからである。ACVが39回以上、ミッションを実施して、その状況下でのSK-5の即時



UNTOLD SEAMAN BLUES

【第8回】

まだ語られていない
LST船員の記録

写真と語り / 木村 守 (元LST乗組員)
文 / 吉野文敏 構成 / 編集部

すでに4度目の航海となり、心に余裕が生まれた。
寄港地ではよく一緒になる他のLSTに気づき、
サイゴン川を遡る風景もよく見知ったモノとなり、
初上陸したニャチャンの映画館では『大魔神』も観た。
新港の建設工事が進むダナンで、ふと考えた。
アメリカはベトナムにどれだけのお金を投じるのか。

手前が木村さんの乗っていたLST、隣がアメリカのLST905。実はこのLST905、沖縄、チュライ、ファンランなど、不思議とあちこちの寄港先で一緒になった。

北ベトナム軍と解放戦線の歩兵戦術 Part 2

—鉄をも溶かす赤い闘志 待ち伏せ—

文／鈴木健太郎 写真／WPPアーカイブ、D White コレクション、US ARMY、USMC

北ベトナム軍と解放戦線が用いた数々の戦術のうち、もっとも多用し、もっとも効果を挙げた待ち伏せ。基本原則を守りつつ独自のアレンジを加えた彼らの待ち伏せについて、前回と同じく分かりやすいイラストを交えて紹介します。



中国製DH-10地雷を手に待ち伏せに備える解放戦線のゲリラ。DH-10は外見こそ一般的な地雷と変わらないがアメリカ製のM18、通称クレイモアと同じ指向性地雷で、北ベトナム軍と解放戦線による待ち伏せで良く使われる兵器の一つであった。M1カービンを持ち援護する仲間が擬装としてアメリカ軍迷彩パラシュートの端切れを纏っているのに対し、地雷を手にしたゲリラがやや目立つチェック柄のスクーフを頭に巻いているのが面白い。

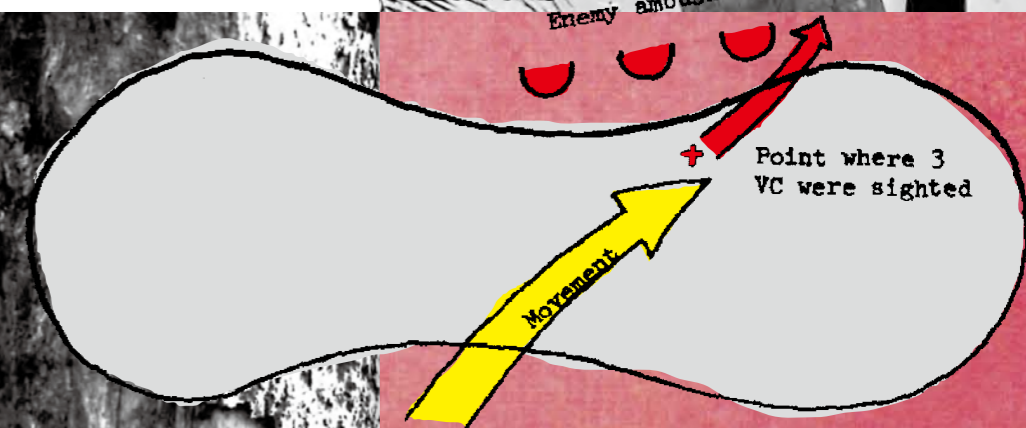


罠を使った待ち伏せ その2

敵の進路の頭上に迫撃砲あるいは榴弾砲の砲弾を吊るしておき、敵が真下に来ると同時に電気信管を使って砲弾を起爆させる。この罠は前述の手榴弾を使った罠よりも高度な作りになっているだけでなく、足元に仕掛けられることが多いブービートラップなどの罠とは異なり頭上に設置されているため発見されるリスクが少ない。



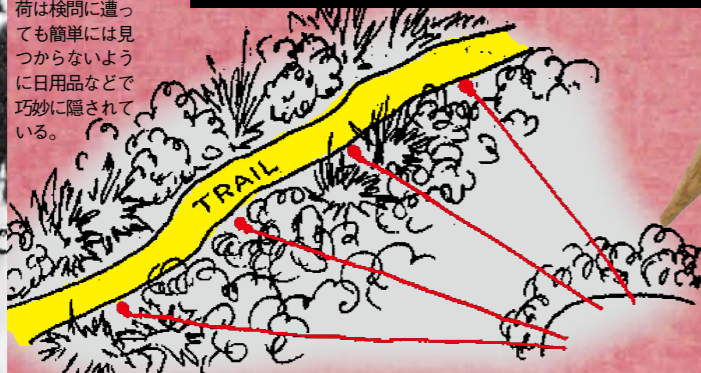
(左) ブービートラップなどの罠に用いられることが多い中国製82mm自撃砲弾とトリップワイヤー。電線、そして市販の乾電池。(右) 椰子の木を器用に登る解放戦線のゲリラ。ジャングルの木々は罠の仕掛け場所としてだけでなく、待ち伏せにおける敵の観測や狙撃にも役立てられていた。



罠を使った待ち伏せ その1

待ち伏せに必要な地雷や手榴弾を自転車に積み待ち伏せ地点に向かう解放戦線のゲリラ。積み荷は検問に遭っても簡単には見つからないように日用品などで巧妙に隠されている。

道に手榴弾とトリップワイヤーを組み合わせた罠を仕掛けておき、敵が側面を晒すタイミングを見計らってワイヤーを引く。遠隔操作式のこの罠は一般的なブービートラップと異なり人力で操作しなければならないが、トリップワイヤーが路上に露出しないため敵に発見される心配がなく、不注意による味方の被害も出ないというメリットがある。



木製の杭に掛け付けられた解放戦線の手製手榴弾。この種の手榴弾は罠としての使用を想定して写真のようにワイヤーを通す穴を備えていることが多い。



SKSカービンの狙いを定める北ベトナム軍あるいは解放戦線主力部隊の兵士。左上の写真と同じくアメリカ軍迷彩パラシュートの端切れを纏っているのに注意。

おとりを使った待ち伏せ

味方が取って敵に発見されることでおとりとなり、追手を待ち伏せ地点に誘い込むという実に大胆な待ち伏せ法。上の図では小さい矢印がおとり、大きな矢印が敵の追手。赤い半円が待ち受ける味方。+が記されているところが待ち伏せ地点となる。北ベトナム軍と解放戦線は常に身軽な動きを見せていたためおとりとの区別がつきにくく、この待ち伏せは非常に効果があった。

枝葉で巧みに擬装した三人が攻撃を行なう。待ち伏せでは左の写真で見られるようなSKSカービンや第二次大戦時の短機関銃といった旧式火器でも十分な動きをした。



THE ENEMY

(the Viet Cong)

アメリカ陸軍第173空挺旅団に付いたあだ名は、天兵ことスカイソルジャーだった。そんな空に棲んだ彼らが、ベトナム戦争に加わった最初の3年間を記録した一冊がある。通例のイヤブックでは、どうしても納まりきらなかった天兵たちの「まるごとベトナム体験」が綴られている。モンスーン気候に支配された異郷の地、ベトナムでの苦闘。ベトコンという生身の敵を目の前にして、天兵たちが過ごしたベトナム時間。そうしたすべての瞬間が、彼らに作用せずにはいられなかった瞬間が、写真から伝わってくる。

THE FIRST THREE YEARS :
A Pictorial History of the 173rd Airborne Brigade (Separate) January 1, 1968 by James B. Channonより抜粋

構成 / コンバットマガジン編集部



謎の多い指導者ホー・チ・ミン率いるラオ・ドン（共産党）はハノイを拠点に「民族解放戦線」に政策と戦略を指示し、侵略行為による南ベトナム征服を目論んでいる。指揮系統はラオ・ドン中央委員会から南ベトナム中央局に、さらに、再統一省を経て6つの区域（ゾーン）とサイゴン特別区およびその周辺へと続いていく。

各区域の地方委員会がハノイの指示に基づいてプロパガンダ、訓練、スパイそのほかの活動を指揮する。各地方委員会の下に県および地区レベ



ルで同様の構造のユニットがある。この共産党ピラミッドの底辺に個々の共産党細胞（セル）がある。

中央局の軍事部門が南ベトナムの共産党戦闘部隊の活動全般を指揮する。これらの部隊は：主力部隊、地区部隊および村落防衛隊に分類できる。

これら3つの部隊の中では主力部隊がもっともよく訓練され、装備も整っており、戦闘組織としてフルタイムで活動している。地区部隊は必要に応じて作戦を展開できるように訓練・装備され、隊員は昼間は農民や商人、夜はゲリラ、という場合が多い。

村落防衛隊は小規模で訓練も装備も行き届いていないのが普通だ。その役割は見張りやメッセンジャーあるいは情報提供者として働くことだ。典型的な村落部隊は10~25人で、手榴弾数個と、古い武器を2、3個共有する、といった感じだろうか。

主力部隊と地域部隊の武器は75ミリ曲射砲や共産圏で製造された短機関銃、さらに、第二次世界大戦やインドシナ戦争時代の古い武器だ。ベトコン部隊はすべて、身近にある材料で効果的な武器を工夫

して作り出す能力に長けている。焼いて強固にした踏み抜き竹やりが敷き詰められたブンジー・ビット、排せつ物が塗られた大きき、そしてこれが一番奇妙かもしれないが、トンネルの屋根や洞穴に縛り付けられた毒ヘビ、こうした仕掛けが共産軍によって用いられ、連合軍兵士が負傷したり死亡したりしている。

ベトコンの戦法はハンニバルから毛沢東に至るまでありとあらゆる手



口を用いており、テロもしばしば使われる。屈服しながらも村を従わせるためゲリラは村長や教師といった影響力を持つ指導者たちを組織的に排除している。斬首といった残虐行為が横行し、子供や女性に対してもまったく容赦しない。

防衛でも攻撃でも戦闘の際はベトコンは射撃、機動作戦、集団での移動や潜入といった手法を用いる。中でも頻りに用いられるのが待伏せ攻

撃で、ほぼ完ぺきと言っていくらい巧みに仕掛けてくる。人里離れた地域で戦闘を開始して救援部隊をおびき寄せ、あらかじめ十分にプランを練り完璧に足並みが揃った奇襲を掛けてくるのがよくある。

ベトコンの基地は、訓練用であれ、貯蔵や病院のためであれ、塹壕や地雷や掩蔽壕で精巧に防御されているのが普通だ。ベン・カット近郊での第173空挺旅団の作戦の際には、6階

分の深さがあり、長さ数マイルにおよぶ複雑に入り組んだ地下トンネルと貯蔵庫の存在が明らかになった。地面すれすれに建てられ、巧妙にカムフラージュされた秘密基地は3m以上離れるとほぼまったく見えない。ここに大隊規模のゲリラ部隊が居住可能だ。

一人一人のベトコン兵は体重100ポンド（45キロ）を少し超える程度で、アジアのジャングルでの厳しい生活に慣れている。1日2ポンドの米で生きられ、信じられない距離を行軍し、ある時は狂信的な

勇気で戦ったかと思えばあくる日には走り去っている、という具合だ。ベトコン、通称「チャーリー」、は持ち物と言えばライフルと弾薬ぐらいで、身軽に移動する。

民族解放戦線の戦闘員はかつて抗仏、抗日、抗中戦争で戦った経験のある古参兵であり、もっと選れば、2000年前から隣国中国との間で起きている紛争で培われた技量と勇気を受け継いでいる。将校や下士官は全



員戦闘経験があり、北ベトナムで訓練を受けることも多い。ベトコンの戦死者が増えるにつれ、新兵が村々から強制的に徴集され、ゲリラ部隊に参加させられている。

皮肉屋の政治将校たちが毎日行なうレクチャーでは無教養の農民の琴線に触れるようなテーマを取り上げる：「再統一、解放、あと数年の辛抱だ」…まったくあてにならない口約束だ。

戦争が長期化し、ベトコン兵たちが現実に目を向けるようになるにつれ、共和国軍に寝返る兵士の数が徐々に増えている。





Militaria Roundup!

CWU-45/P & CWU-36/P フライヤーズ・ジャケット

飛行士を保護するために開発され、発達してきたフライング・クローゼングだが、その過程の中で問題となったのが着用者を飛行機の火災から護ることだった。この問題は耐熱、難燃性繊維の開発によって大きく改善され、CWU-45/PとCWU-36/Pの傑作フライトジャケットが誕生する。

解説/菊月俊之 写真/青木健格 撮影協力/中田商店 ☎03-3823-8577 <https://www.nakatashoten.com/>、MASH ☎06-6567-3312 <http://www.mash-japan.co.jp>

飛行機火災と飛行服

空中戦において被弾が原因の火災は航空兵にとって恐怖の対象であり、それは飛行機が兵士として使用された第1次大戦から変わっていない。飛行服の素材は1950年代にコットンからナイロンへ移行したがナイロンやレーヨンなどの化学繊維は高温にさらされるとゲル状に変化し、衣類の場合は皮膚に付着して重度の火傷を引き起こす(死亡する危険も)。この問題はベトナム戦争で表面化し、軍は搭乗員を火や高熱から護る手段を模索。そこで注目されたのがデュボン社が開発した新しいナイロン素材の“ノーマックス(アラミド(芳香族ポリアミド)繊維の商品名)”だった。耐熱アラミド繊維は直射熱の場合400℃の高温に耐え、焼く1分間繊維としての状態を保つ。また炎から離れた場合の輻射(ふくしゃ)熱では1000℃まで耐え、自らは燃えることなく炭化することで大きな耐熱能力を発揮する。

アラミドの耐熱性により、搭乗員は火災を起こした乗機から脱出するまでに時間的余裕を得ることができ、アメリカ軍はこの素材を使用した各種フライング・クローゼングを開発。その結果採用されたのが今回紹介するCWU-45/PとCWU-36/Pのフライヤーズ・ジャケット(フライトジャケット)だ。そして現在では一般に“ノボロイド(カインール)”と呼ばれる防災素材繊維が使用されており、今回紹介する最新モデルのCWU-45/Pもノボロイド製の。

新素材ノボロイド(カインール)

今回紹介するCWU-45/Pをはじめ、現在アメリカ軍フライトクローゼングに使用されているのがノボロイド(カインール)繊維だ。ノボロイドはフェノール樹脂を繊維化した三次元構造の高機能繊維で、特殊な分子構造を持ち、炎にさらされても熔融せず、煙も出さず、炭化するのみで。高熱で発火することもない。そしてノボロイドは①難燃度が高い、②溶融しない、③収縮が小さい、④有毒ガスが発生しない、⑤熱伝導率が小さい、⑥極低温(-192℃)に耐える、⑦酸や有機溶剤に強い、⑧柔らかい風合いで比重が有機繊維より軽い、という特徴を有する。

一般には知名度は低いが、ノボロイドの歴史は1960年代に遡る。開発の背景にはNASAのスペースシャトル計画で、シャトルの構造物として使用する安価な炭素繊維が必要とされたことがあった。68年には実験室規模での繊維化に成功したが、機械的強度不足からスペースシャトルでの使用は見送られた。しかしノボロイドには防火性という特徴を有したため、消防服や安全作業服への使用を念頭が開発が続けられる。日本でも1970年代から研究開発が行なわれ、86年から本格的工業生産を開始。ちなみにカインールを生産しているのは日本の群衆化学工業株式会社で世界で唯一といわれる。



戦闘中の被弾等による火災は飛行士にとって恐怖の対象だった。ベトナム戦争中に難燃性の素材を使用した飛行服が開発され、これが好評だったことを受けて難燃繊維を使用したフライトジャケットが開発される。写真は広報写真撮影のための飛行準備を行なうF-100Fの搭乗員(後席がフィトグラファー)と地上要員で、ベトナム戦争中の撮影。(Photo: U.S.A.F.)



MA-1(空軍)

数あるフライトジャケットの中でもっとも有名な空軍のMA-1ジャケット。“インターミディエート・ゾーン”と呼ばれる-10~10℃の温度域での着用を目的としたもので、1953年頃から支給が開始。CWU-45/P採用後の78年にはフライング・クローゼングから地上要員用に区分変更され、90年に生産が中止されている。(撮影協力: 中田商店)

L-2B(空軍)

CWU-36/Pの前モデルとして空軍が使用したL-2Bジャケット。“ライトゾーン”と呼ばれる10~30℃の温度域での着用を目的としたもので、空軍独立後の1949年頃から支給開始され、L-2、L-2A、L-2Bとモデルチェンジされている。CWU-36/P採用後の79年にフライング・クローゼングから一般用に変更された。(撮影協力: 中田商店)

ジャケット、ウインター・フライング・スーツ(海軍)

アメリカ海軍がCWU-45/Pの前に使用した冬期用フライトジャケット。1954年頃に採用され、CWU-45/P採用後の77年に廃止された。アイテム名には型式が付いておらず、一般には“J-WFS”または“WEP”と呼ばれる。“G-8”と呼ばれることもあるが、これはアビレックス社が一般向けに販売した商品名に由来。写真はセスラー製の複製版。(撮影協力: 中田商店/A-950 セスラー WEPジャケット/価格1万5800円)



CWU-45/P フライヤーズ・ジャケット JACKET, FLYER'S, COLD WEATHER, TYPE CWU-45/P

CWU-45/Pは1973年にアメリカ海軍が採用した冬期用フライトジャケットで、一般に“WEP”と略称される冬期用フライトジャケットの後継モデル。ベトナム戦争における戦訓から素材には耐熱繊維のアラミド(芳香性ポリアミド)を使用。アメリカ軍のフライとジャケットローゼングで最初にアラミド繊維を使用したものとなった。そして、このジャケットの優秀性に注目した空軍も1975年に採用。海空軍共通のフライトとなった。採用された当時の名称は“Jacket, Flyer's Cold Weather”だったが、77年から“Type CWU-45/P”の型式が追加されている。なお“CWU”は“Clothing Warms Unit”の略、“P”は“Personal Use”の略で、「個人用温暖衣料ユニット」くらいの意味だ。

アメリカ空軍の服装規定でCWU-45/Pはフライング・デューティ・ユニフォーム(FDU/オーバーオール)の上に着用するアウターと規定され、ジャケットの色はFUUの色(グリーンとデザート)に合わせる。また制服(サービス・ユニフォーム)および空軍戦闘服(ABU/Air Force Battle Uniform)と組みあわせて着用することは禁じられている。



CWU-45/P

1973年にアメリカ海軍が冬期用フライトジャケットとして採用したCWU-45/P。その後アメリカ全軍と沿岸警備隊によって採用されたほか、西側諸国の空軍でも採用されている。今回紹介するのは最新のスペックMIL-J-83388Eで素材に難燃繊維のノボロイドを使用。採用当初は色がグリーンのみだったが、現在ではタン(デザート)のものが追加されている。(撮影協力: MASH/US AF CWU-45/P Flyers Jacket/価格8万5800円)

スライドファスナー

スライドファスナーはYKK製を使用。YKKは1934年に設立されたサンエス紹介がルーツ(YKKと社名変更したのは94年)で、60年にはアメリカに進出し、64年に現地工場を設立している。ちなみに空軍の服装規定ではスライドファスナーは最低でも中間位置まで閉じようように指示されている。



レスキュー・パネル用ポケット

初期のモデルにはジャケット内側にベルクロで着脱できるレスキュー・パネル(救助要請用布板)収納用ポケットが設けられていたが、“CWU-45/P”の型式が追加された77年以降のモデル(MIL-J-83388A)では廃止されている。



MIL-J-83388A
1973年9月5日制定のスペックMIL-J-83388AのCWU-45/Pのラベル。アイテム名が“Jacket, Flyers, Cold Weather”で、型式が付いていないのに注目。CWU-45/Pの型式が付くのは1977年以降。

MIL-J-83388E

こちらはスペックMIL-J-83388EのCWU-45/Pに付けられたラベル。上にアイテム名やスペック等のデータを記載。下は使用上の注意で、「このジャケットは耐火性素材で作られている。ほかに特別な防炎加工を施す必要はない。ジャケットはドライクリーニングもしくは洗濯機で洗える。絞ってはならない。アイロン処理やプレス加工は不要」とある。



ジャケットのライニングにはキルトを使用。キルトのステッチは俗に“ヘチマ”または“ヒョウタン”型と呼ばれ、中綿が偏りにくいのが特徴。空軍における前モデルのMA-1ではライニングがレスキュー・カラーのインディアン・オレンジだったが、CWU-45/Pでは表地と同じセージ・グリーンに変更されている。これはCWU-45/Pが海軍の開発なの理由のようだ。



MIL-J-83388A



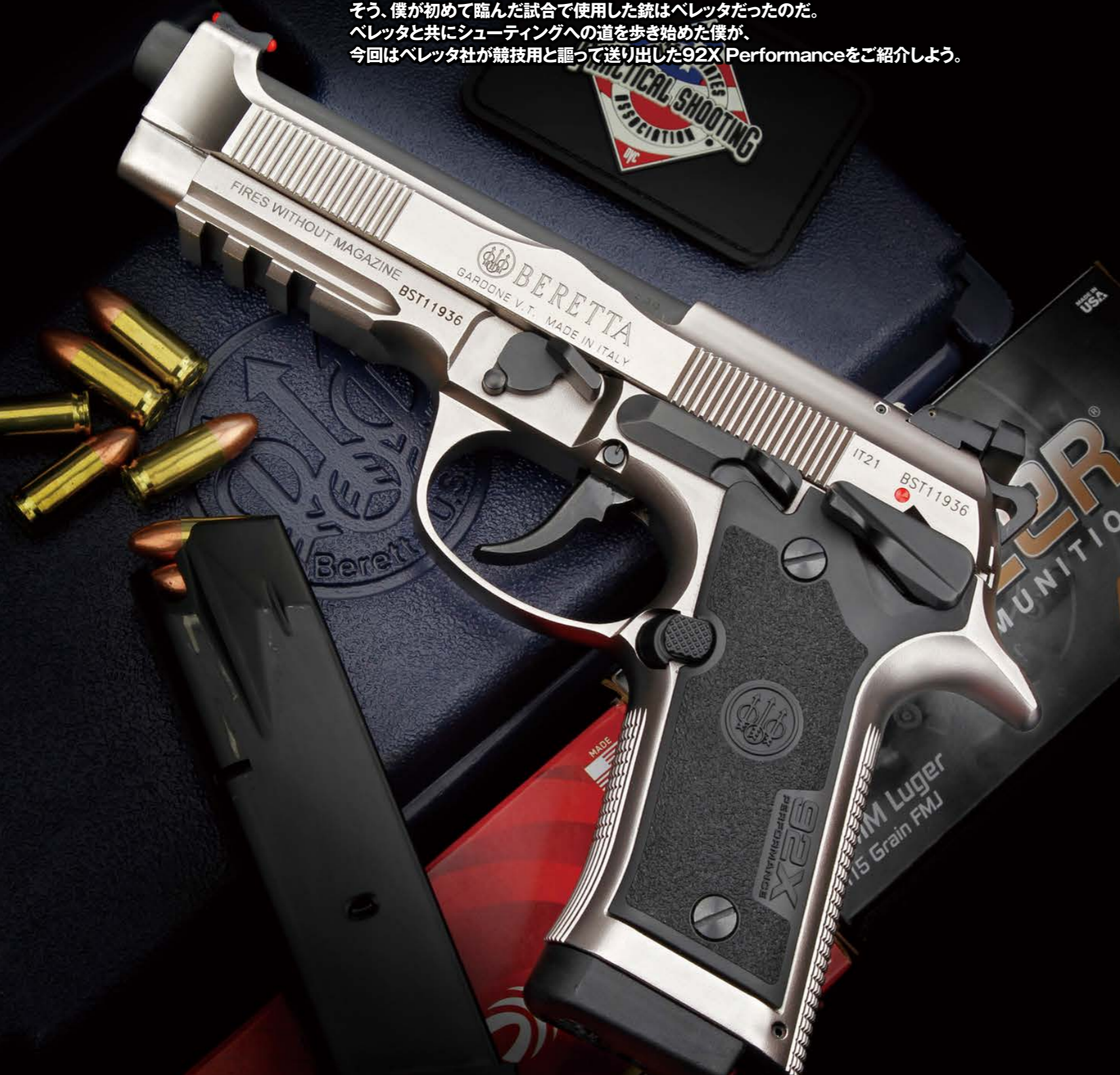
前立て

風の侵入を防ぐ目的で前合わせに設けられた前立ての上部は斜めにカットされているが、これはスペックMIL-J-83388Bから変更されたもの。また前立てのステッチは縦方向に入れられていたが、MIL-J-83388Dからジグザグ・ステッチに変更されている。



Beretta 92X Performance

僕が日本でコンペティション・シューティングの世界に足を踏み入れたのは、14歳の時。初めて参加したスティールチャレンジの試合で撃った銃は、東京マルイ製のガスブローバック、M92Fだった。そう、僕が初めて臨んだ試合で使用した銃はベレッタだったのだ。ベレッタと共にシューティングへの道を歩き始めた僕が、今回はベレッタ社が競技用と謳って送り出した92X Performanceをご紹介します。



日本での思い出

日本でもっとも知られ、人気の高いモデルのひとつが92FSだろう。先にも記したように初めて出場した試合で僕が使用したのが東京マルイ製のM92F（ガス・ブローバック）だった訳だが、何故ハイキャバ等の1911/2011系を使用しなかったのかといえば、答えは単純。当時はまだ東京マルイのハイキャバが発売されていなかったからだ。また当時、1911/2011系を発売していたメーカーは、どちらかというと高級路線であり、中学生の子供が使うには予算的にハードルが高いモデルが多かった。その点、東京マルイの製品はコストパフォーマンスに優れ、尚且つ、

箱出し状態でも競技に使用できるだけの高いアキュラシーと耐久性を持っていたことが大きかった。日本に居た頃、M92Fをトータルで30万発近く撃っており、グリップ、トリガー・ブルの感触は、今でも身体に染み付いている。しかし、僕が競技の世界で目指していたのは頂点。スティールチャレンジでの総合優勝を狙う銃として考えた時、エアソフトガンであってもダット・サイトのマウントを金属製（亜鉛）のフレームにマウントできる2011シリーズがもっとも適切なモデルになった。僕はアイアン・サイトを使用する機会では、M92Fを使い続けたが、ダット・サイトを搭載するレースガンと

- Beretta 92X Performance**
- 弾数: 15発
 - 重量: 約1,350g
 - 口径: 9X19mm
 - 価格: \$1629.00

しては、高校生になった頃には2011シリーズを愛用したのだった。

未だに人気の高い古き良きイタリアン・デザイン

映画やドラマの影響で人気の高い



として自宅に銃を置きたい人、砂漠やレンジでたまに撃つ機会がある人などの間では、未だにベレッタ・シリーズの人気は高い。だからこそ、今でも生産が続いているのだろう。一般人の間では、一定の需要がある92FSだが、警察／軍関係の現場の世界では、ライト類を装着出来ない92FSは、過去の存在となってしまった。同じベレッタのモデルならM9A3等が警察／軍関係の需要に応えるモデルだ。では、日頃から試合に向けて練習を重ねるコンペティティブ・シューター達の間での92FSの評価はどうだろうか？ 残念ながら、競技の世界において92FSを使用している人を目にする機会は減多にない。僕自身、日本ではガスブローバックを愛用していた訳だが、アメリカでは一度も試合で92FSを使用し

ベレッタ92FSだが、それはアメリカでも一緒だ。そのスタイルの良さから今でも人気は高い。スライドの大きく開いたデザインは、女性の目にも他とは違うモノとして映るようだ。その辺は流石はイタリア製というべきか。勿論、見た目だけに限らず、実際に撃ってもその性能の高さは誰にでも感じられる。初心者にはSIG P226系、CZ系そして、92FSを撃ってもらって感想を聞くと92FSを撃ちやすいモデルとして挙げる人を、過去に何人も見てきた。一般人や、競技に出る予定が無くあくまでも護身用

SV INFINITY SPEED COMP IV

WESTERN ARMS

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
 @ウエスタンアームズ
 ☎03-3407-5922
 http://www.wa-gun.net/jp



大型スクリーンに高輝度のドットが映し出されるオープンエア・タイプのサイトは、熟練したWAスタッフが慎重にゼロインした状態で出荷される。



SVインフィニティスピードコンプIV
 ●全長:約273mm ●銃身長:約138mm
 ●重量:約1,200g ●装弾数:33+1発
 ●価格5万5,000円 ●好評発売中!!

ったこともあり、WAも「アイアン・マッチ」などのレース・カスタムをそのスタート・モデルに選択した。最大級の熱容量を誇るWAのハイキャップ・シリーズは、スタンダードなM1911を遥かに超えるハイスピード・ブローバックと強いキック、確実なアクションでトイガン・ファンの絶大な支持を獲得。その後、タク

クラスのシューターはもちろん、レース初心者からも絶大な支持を得て現在に至っている。今月はそんなレース・カスタム第2世代の最新バリエーション、スピード・コンプ・シリーズの2022年モデル「SVインフィニティ・スピードコンプIV」が発売される。

プロフィールは、2019年登場の「SVインフィニティ・スピードコンプRタイプ」と2021年登場の「SVインフィニティ・スピードコンプIII」の中間的なデザイン。スライド・サイズはIIIと同様の5インチ・サイズ、アルミ削り出しのコンベンセイターは、Rタイプに準じた3ポート・タイプを組み合わせている。コックしやすいスクエア・ホールのスピード・ハンマー、両サイドをシェイブした



素早いスライド・リカバーを可能にするコッキング・ピースは、スピードコンプIIIから引き継がれたナロー・タイプ。

ドット・サイトは、丈夫な金属製シャーシに左右計6本のスクリューでしっかり固定されている。



高度なテクニックを増幅する ハイキャップ・レース・カスタム 2022年バージョン、 SVIスピードコンプIV

数多く存在するガス・ブローバック・ハンドガンの中で、アクション、迫力、実銃感など、すべてにおいてトップを走るウエスタンアームズ(以下:WA)のマグナ・シリーズ。市場デビューからすでに30年近い時間が経過し、さまざまなマイナーチェンジが施されてきたが、基本的なメカニズムは現在も変わらず引き継がれている。

そんなマグナ・モデルの5周年記念モデルとしてセンセショナルに登場したのが、ダブル・サイズのマガジンを装備したハイ・キャパシティ.45シリーズ。もともと各種のハンドガン・マッチに向けたカスタムだ

ティカル系モデルやコンシールド・モデルなど、無数のバリエーションを排出した。

シューティング・マッチを目指すシューターよりも、通常のアクションファンやコレクターからの需要が多いことは想像に難くない。WAではそれらの需要に応えながら、常に研究を怠らずレース・カスタムを開発。スピード・シューティングに挑むマッチ・シューター達の大きな信頼を獲得してきた。2015年には、シーモア・タイプのドット・サイトを標準装備した第2世代ともいべきシリーズをリリース。高度なテクニックを身に付けたトップ・

※撮影用モデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様異なる場合があります。



歓迎横浜

DJちゅうの

GEARHEADS JUNCTION

JPNLEM6 /
welcome to
YOKOHAMA
#JPNLEM6

GEARHEADS: [ギアヘッズ]
熱狂的な装備フリーク
JUNCTION: [ジャンクション]
接合、連接、交差点または分岐点

写真・文/DJちゅう 協力/yoh (@yoh_ill) フィールド/GET@City (#ホテルでサバゲ)





COMPACT CARRY GAS GUNS

Photo & Text by Takeo Ishii 株式会社東京マルイ ☎03-3605-1113 www.tokyo-marui.co.jp

大好評&大ヒットの「小さな拳銃」シリーズ 4機種&楽しい純正オプションが揃い踏み♪ いま一度、その「大きな魅力」に迫る!

2021年、第1弾「LCP」と第2弾「BG380」でシリーズ始動!
そして2022年も第3弾「LCPⅡ」、
第4弾「CURVE」が立て続けにデビュー!
さらにシステムホルスター、ロングマガジンと
純正アクセサリも続々登場し、ますます盛り上がる
東京マルイ/コンパクトキャリー・ガスガンシリーズの
魅力を改めて比較・検証してみよう。

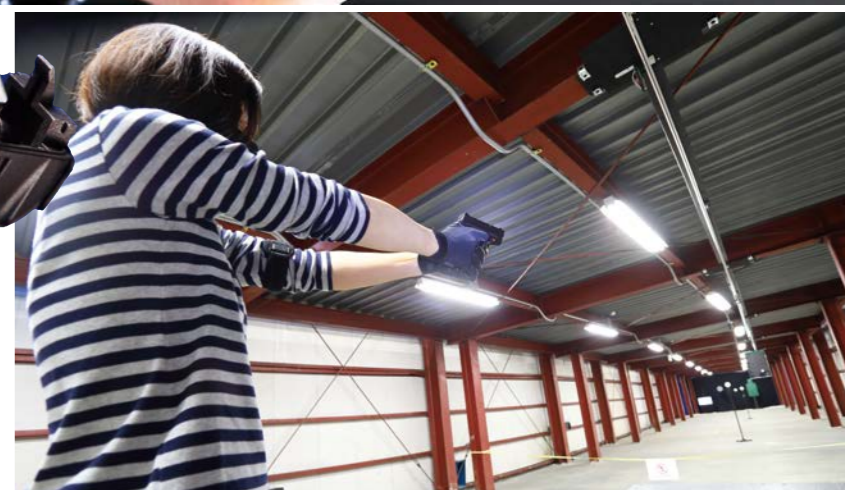
小気味良いクリック感と共に銃をロックしつつもドロウはスムーズ♪ 左右兼用かつイン&アウト両方で使えマグハウチは連結も分離も自由自在。多様なスタイルに対応するための連結パーツやタクティカルベスト胸部等に取り付けるためのMOLLEアダプターも付属。LCP用、BG380用、LCPⅡ用がある。
●コンパクトキャリー・ガスガン用ホルスター 価格：各4,378円(税込)



この手の護身拳銃は一般的な室内や道幅を想定した15フィート(≒約4.6m)以内で咄嗟に撃つようデザインされている。



トリガーに連動するサイドプレートがマガジン上部の給弾ノズルを動かしBB弾をHOPチャンバーに装填……!



コンパクトキャリー・ガスガンシリーズなら30m先のマンシレット標的にだって命中させられる。この実射性能こそ東京マルイ・クオリティ!
撮影協力/BATON Range <https://www.batonrange.com>

近年の実銃界でトレンドになっている小型&薄型の.380口径オートマチック護身拳銃をモチーフに、「18歳以上用」の本格派パワーと高性能HOP-UPの搭載で「0.20gBB弾を20m以上フラットに飛ばす固定スライドガスガン」として2021年からシリーズ展開する大ヒット商品が東京マルイ/コンパクトキャリー・ガスガンシリーズだ。2022年3月に第3弾「LCPⅡ」、そして6月には第4弾「CURVE」が加わり何れも好調なセールスを記録! その勢いは益々加速している。

元になった銃が護身用の小型ピストルである、という性質上、自宅で

プロターゲット等を相手にインサイドパンツやポケットからのドロウ&シュートで気軽に遊べたのもここ数年の時勢にハマっていたのだと思う。これからはフィールドにもレンジにも大勢の人が戻ってくるだろう。2022年夏はサバイバルゲームやシューティングで卓越した実射性能=このシリーズの本領が、いよいよ発揮されるのではないだろうか?

トリガーを引き切るとハンマーが倒れバルブを解放! さらに板バネ状アームの絶妙なテンションがHOPチャンバーのラバーを通して適正な回転をBB弾に与え、遠くまで正確に発射する。





令和4年度 富士総合火力演習

毎年恒例の総火演こと富士総合火力演習がやってきた！
しかしながら、コロナ禍にあり、今年も一般公開はなし……。
そんな中ではあったが、新装備が目白押しの開催回となった。
陸自史に残ること間違いなしの総火演をご覧ください！



水陸両用車AAV7から下車展開する水陸機動団の隊員たち。彼らが手にしているのが最新の20式小銃だ。今回の総火演では射撃訓練まで公開した。

2022年5月28日、東富士演習場畑岡地区において「令和4年度富士総合火力演習」が行われた。略称である「総火演」が、すっかり定着した。自衛隊ファンのみならず多くの

国民が知る演習だ。陸自最大規模の演習であり、今回で64回を数える歴史ある演習のひとつだ。1966年から一般公開されるようになった。入場券制をとって

おり、東日本大震災以降、自衛隊人気が高まりもあり、今ではすっかりプラチナチケット化してしまった。20年ぐらい前、筆者が御殿場市内のガソリンスタンドに給油のため立

ち寄ると、店員から「総火演のチケット入ります？」と配られていたことを考えると、にわかに信じられないが事実である。しかし新型コロナウイルス感染

拡大予防のため、3年連続で一般公開は中止。陸自にとっても募集広報に欠かせないものとなっていたし、国民にとっても実弾射撃訓練を見学できるまたとないチャンスであった

ので、両者にとって非常に残念な結果となった。総火演は前段と後段の2部構成で繰り広げられていく。前段は各火器・火砲の特性を生かした射撃、後段が

シナリオに沿った一連の戦闘状況下での射撃となっている。まずは、前段にて、今回初めて射撃した装備がある。それが19式装輪自走155mmリゅう弾砲だ。全国の特科

部隊に配備されている155mmリゅう弾砲FH70の後継となる装備で、トラックベースの自走砲だ。北海道などに配備されている装輪式の自走砲にはない機動力が特徴だ。これまでの